

関西学生フォーラム 第1回大会報告

於 立命館大学

世話人 松島剛史 (立命館大学非常勤講師)

1. はじめに



日本スポーツ社会学会の関西学生フォーラム第1回大会が、2012年6月9日(土)に立命館大学衣笠キャンパスにて開催されました。本フォーラムは、2012年度から関西あるいは西日本の学生会員及び若手研究者を中心に発足されました。その目的は、日本スポーツ社会学会の更なる発展を目指して、これまで主として関東地方で行われてきたフォーラムと同じく、学生会員の知的交流を促進し、それぞれの研究活動を活性化することにあります。

記念すべき初回の主な目標は、研究発表を行うこともさることながら、これまでスポーツ社会学を専攻しながらあまり出会う機会の少なかった学生会員が一堂に会して語り合い、親睦を深めながら関西学生フォーラムの方途について考えることにありました。その意味で、突然の呼びかけにもかかわらず、総勢27名の先生・院生のご参加を賜り、本大会ならびに懇親会が盛況を呈したことは、所期の目標を達成できたことを意味するものと思います。

2. 大会概要

本大会では、若手研究者3名による研究発表(各1時間程度)と今後の方針に関する会議を行った。

2-1. 研究発表セッション

①トライアスリートの「自分らしさ」に関する考察

浜田雄介 (広島市立大学)

本報告は、マラソンやトライアスロンなど長時間の身体的苦痛によって特徴づけられるエンデュランススポーツに向かう理由について、トライアスロンの体験の意味をトライアスリートの「自分らしさ」の形成と関わらせて考察されている。とりわけ、トライアスリートそれぞれの「語り」にみられる「自分はこれでいいのだ」という、生きていくうえでの「確かさ」や「自律」への志向が「自分らしさ」として丁寧に記述されており、単なるトライアスリートとしてのアイデンティティへの収斂や回収として論じてはならない様相が明らかにされた。フロアからは、従来のアイデンティティ論を越える意味でトライアスロンという種目の特質や身体を介した体験そのものの内実をもっと前景化してはどうかなどの意見が寄せられ、有意義な議論となった。

②「コツ」をつかませる「コツ」について

小丸超（龍谷大学）

さまざまなスキルや身体技法によって成立するスポーツには数え切れないほどの「コツ」、そして「コツをつかむ」という体験（＝コツ体験）が存在する。本報告は、こうした身体的な技能の習得を念頭において、「コツ体験」の発生メカニズム、そして「コツ」をつかませる指導法について理論的に考察するものであった。そこでは、超社会化論（亀山佳明）や生命の躍動力（アンリ・ベルクソン）といった理論枠組みから、コツ体験という競技者の内的運動が究明され、またそうした非連続的な飛躍を可能たらしめるものとして潜入という指導方法が提起された。質疑応答の時間には、社会化と超社会化の関係性や、競技者を「内から指導」する潜入の特質などについて盛んに議論された。



③グローバル資本化するプロアスリートのもとにおける欧州プロ野球とアスリートの移動：アラン・クラインを超えて

石原豊一（立命館大学）

本報告は、欧州（イタリア）のプロ野球リーグをフィールドに据え、プロスポーツという場の拡大とスポーツ労働移民の急増という二つの視点から、スポーツのグローバル化過程を描き出そうとする試みであった。とりわけ特徴的なことは、「野球不毛の地」とされる欧州でプロリーグが発足し、そこに各国の若い選手が集まるという現象が、経済的な要因ではなく、先進国の若者を取り巻く環境の変化（社会的逃避の「ファッション化」と国際化）によって引き起こされたとみる視点である。この点は、野球のグローバル化研究の第一人者であるアラン・クラインによって提起された“**Growing the Game**”モデルでは汲み取りきれないモデルを呈することに繋がるだろう。フロアからは、若い選手のグローバルな移動を「社会的逃避」としてネガティブに評することの妥当性や、それと関わって彼らの歴史社会的背景について質問が投げかけられ、活発な議論を呼んだ。

2-2. 今後の方針に関する会議

本セッションでは、参加者の活発な議論を経て、主に以下のことについて承認された。①関西学生フォーラム運営組織（案）の承認、②2012年12月8日（土）の研究会主催フォーラム（於、立命館大学）において第2回学生フォーラムを開催する、③同年10月に定例研究会ならびに12月の第2回大会に関する会議を開催する、④2013年3月の学会大会における学生フォーラムに向けて関東学生組織と連携を図る。

3. 終わりに

第1回大会を無事に終えることができたのも、ひとえにスーパーバイザーの伊藤公雄先生（京都大学）をはじめ、企画立案段階から当日に至るまで様々なかたちでご協力してくださった先生方、また発表者の皆さま、そしてスタッフとして陰ながら支えてくれた立命館大学の院生諸氏のおかげでございます。お一人お一人のお名前を挙げて御礼を申し上げるべきところではございますが、この紙面を借りて御礼を申し上げます。最後に、改めましてご参加いただいた皆さまには、本フォーラムを盛り上げていただき、誠にありがとうございました。今後ともお力添えのほどよろしくお願い申し上げます。

